

レビューになった琉球舞踊

— 戦前の本土における琉球舞踊上演の一形態 —

清 村 まり子

はじめに

沖縄ブームと言われるようになってからもう何年経つのであろうか。沖縄料理は全国放送で特集を組まれ、ゴーヤーなどの食材は一般化し、エイサーは全国各地、いや世界各地でも踊られるようになった。三線も今や通信販売やインターネットで気軽に購入でき、ビデオ付き教則本の販売や通信教育まで行われている。沖縄の芸能は、もはや沖縄人のみの娯楽ではないのである。

このような琉球芸能の受容の中で、本稿では、戦前の日本本土において、本土の人々によって構成され、演じられた琉球舞踊の事例、特にレビュー¹化されたものについて紹介する。沖縄の人々が本土で公演を行った場合は、何かと情報も多いかと思われるが、本土の人々によるものの場合、今現在においても沖縄に住む我々にはなかなか聞こえてこないものである。後述する「琉球レビュー」も、『沖縄大百科事典』に「琉球芸能の紹介に大きな役割を果たした」と書かれているにも関わらず、その実態はなかなか浮かび上がってこない²。そこで本稿では、まず、(1) どのような経緯で琉球舞踊が本土の人々によって踊られるようになったのか(2) 上演はどのようなものだったか(3) 聴衆にどのように受け止められたのかについて、出来る限り当時の新聞記事や文献をもとに追ってみたいと思う。

1. 祇園で踊られた太鼓踊—「都をどり」³

春の京都の風物詩としてすでに定着した都をどり。明治27年11月、その都をどりが行われる祇園の新地歌舞練場恒例の大温習会で、番組大切の一景に「太鼓踊」が踊られる。都をどりで直接、演ぜられたものでは無いが、この大温習会での「太鼓踊」が後の舞台にもつながるので、この記事から紹介したいと思う。

当時の新聞記事によると

番組中大切の手打連中三十五人は一斉にて黒の裾模様に肩は紅梅色の染てあづま笹をちらし帯は惣黒のやの字結びにし道具建は最初鏡板の舞臺にて返しに出口の柳是を天井あがりにして廊中の景色を見せる仕組みなり其の手打歌は五人宛一組ありて一番高砂、二番七福神、三番道成寺、四番寢言の中へ先年祇園館に興行せし琉球芝居の俳優が演ぜし太鼓踊の曲節を辻村太郎氏が傳習してあり是を井さとのお國、角岩のお種、谷村のせい三上のお君、山川のこの、岸田のこの、万種のお留、井原なみの可憐兒八人へ授け滑稽交りに挟む事とし此少女どもが着附及び髪風まですつかり琉球風に仕立るといふ些ひねつた趣向といふべく例年ながらといへ今年の番組をづらりと見れば第一面なみ甚ただ宜しく腕利の半老婆も多数腕を揃へてかゝれば面白さはいはずともならん

* 下線は筆者による（『日出新聞』明治27年11月1日）

とある。記事にもあるように、この年の前年の明治26年、沖縄から沖縄芝居一座が大阪、京都、名古屋で興行を行った。この興行については池宮正治の「沖縄芝居参上」（池宮：1992）に詳しいが、渡嘉敷守儀らの一座によって、「琉球節踊」（「上り口説」）、や「女花笠踊」、「國頭塵」などの舞踊と「姉妹敵打」や「手水の縁」といった組踊が上演されている。興行は失敗であったようだが（池宮：1992：163）、各興行先で沖縄芝居は新聞で取り上げられる等、当時の大阪、名古屋の人々にある種の特別な興味を持って受け入れられたといえるであろう⁴。

さて、本題の祇園温習会での「太鼓踊」だが、残念ながら、現在、筆者が探すことのできた「太鼓踊」は、先に紹介した明治27年の記事のみで、ここからは、この踊りが太鼓を使った踊りであろう事以外、伺い知ることができない。しかし、この手がかりになるのが、時代が下がった大正8年3月3日の都をどりの記事である。

都踊の呼物＝平和踊

二十六年前に流行た太鼓踊 今度の都踊の舞臺に上せる*

都踊の唱歌も彌確定して場面の配置等も既に過日記載したるが、其中の平和踊に就て、之れは去る明治二十七年十一月の同廊温習会の切に手打を出した中の餘興に琉球の太鼓踊りと云ふのが仕組まれた事がある、今度の平和踊と風俗其他囃し歌とも其時とは餘り変化がないので茲に其時の様子を温ねて記して見よう、其時の◎太鼓踊りは明治二十六年中今の花見小路に祇園座と云う劇場のあつて其處



写真1

へ琉球芝居の一座が乗り込んで満都の好奇心を(賑)りたてた事がある、其中に此太鼓踊りと云ふのがあつた、他の芝居や彼の地の舞踏言葉も違ふし技藝としても餘り注意されなかつたが太鼓踊りのみは簡単なのと動作にも甚だしい骨が折れぬのと眞似易い處から

◎祇園町邊りでは藝妓が客に聘ばれた場合■之を眞似て其動作や歌の端々が流行した、之に乗氣になつた三上あいと松八重のありの兩人が琉球人に就いて太鼓踊の歌動作共確かり習得して演じた處、大いに人氣に投じたので遂に翌年の温習會に未だ舞妓にも出ない十一、二、三位な處女八人を選抜して切の手打の中の餘興として祇園の舞臺に上せたのが、即ち

◎寫眞の通りのものであつて其時は大柄四人と小柄な兒四人が互い違ひに一人宛入り交らして一様に緋縮緬の長襦袢に浅黄朱子の襟をかけて茶、黒、白、市松の木綿の単衣のヒツバリ様の物を来て髪はハワセに糸鹿の子を堅にかけて両の手に撥を持ち各小指に房をかけた大小八人の處女が花道から振面白く出て舞臺にかゝると

◎中央には丸い臺を赤白染違ひに蝶と燕を染抜いた胴巻をして、其上へ大太鼓が仰向いて乗せてある其廻りを八人の處女が「イメチカハ、サトメヂヨム、タチタモレ、エンヤヨノ、ヒヤルガヒー」以下同調五節(少々實際の音は違ふが昨夕刊記載の平和踊の條を参照すれば歌は同じ事である)と唄い連れつゝ

◎五つの調子を唄ひ且踊り終つて今度は裏花道へ這入るのであるが、(中略)

◎今度のは着附其地にも■當時のものとは今少し琉球地方の風俗を濃厚にする筈であるが、ヒヤルガヒーと云ふのが同地の平和の日と云ふ意味で最も本年杯には打つて付けの唄と云ひ

エヌアキテ、テダヌアガラワン ヨタシヤ

杯最も戦捷國の日本と云ふに適合した歌拍子であるのも奇すべしである

*下線は筆者による。字潰れで判読できなかったものは■で表した。以下、同様。

(『日出新聞』大正8年3月13日)

これによると、明治27年の太鼓踊りは、どうやら前年の沖縄芝居興行の際に、彼らの「太鼓踊」を座敷で真似て人気を得たのが発端であった。それで直接、役者に習い、さらには翌年の温習会の舞台にのったという経緯である。その時の写真が、写真1であるが、大きな太鼓の周りを踊り子達が叩きながら踊るという趣向のようである⁵。

初日明けの4月2日の都をどりの記事では、

夫れから呼び物は矢張り昨年の鞆鼓踊と同様に平和踊で琉球風の太鼓踊が目先が
変わって大に歓迎せられる事であろうと想像できる▲既に明治廿七同廓温習會の
切に手打ちの餘興として出した際も大評判を取つて道行く子供まで（ヒヤルガヒー）
を謡歩いたものであると云ふから今回も亦一大人気を■り■て、一盛り流行する
事と想像される（後略）

*下線は筆者による（『日出新聞』大正8年4月2日）
とあり、明治27年に踊られた際、とても人気があったようである。その為、この琉球風の踊りへの期待は大正8年の都をどりに続いていくのである。

では、その大正8年の際に上演された踊りはいかなるものであったのだろうか。まず、先の新聞記事から解るように、明治27年に踊られた「太鼓踊」は、大正8年には「平和踊」と名を変えている。4月3日の記事には、この「平和踊」の写真も掲載され、踊りの様子を少し垣間見ることができる。記事には「殊に琉球踊りから平和踊りになる際足元から英佛米伊等の國旗と日章旗がサツと現はれて國旗を翳して踊る處大喝采で殊に握手する振の處では外國人迄大拍手である」とあり、写真2のように4組の女性達が片手に旗を持ちながら握手している様子が見える。ここで注目すべきことは、明治27年の写真とは違う、その衣装である。皆揃いの型染めらしき打ち掛けを着て踊る姿が琉球舞踊の女踊りのそれと似ている。先の記事に、「着附其地にも■當時のものとは今少し琉球地方の風俗を濃厚にする筈である」とあるように、写真3の「平和踊」の写真からは打ち掛けの袖も広袖で、琉球の壺織り風の着付けをしているなど、なるほど琉球色が濃厚になっていることがわかる。

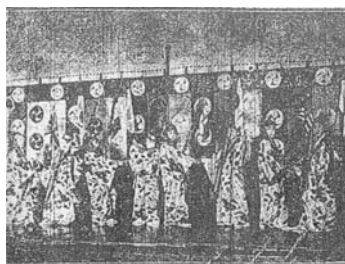


写真2

さて、明治27年には「太鼓踊」として踊られたものが、
いかにして大正8年には「平和踊」となったのであろう
か。この年に歌舞練場から発行された都をどりのパンフ
レットには、以下のように紹介されている。

第五 平和踊

此の段は平和を祝賀する意にて琉球の舞曲
を模し継ぎて新案の愉快なる踊を演ず
琉球の平和踊は太鼓踊とも称す
其の起源は尚巴士（ママ）



写真 3

の頃にて大凡七百年前よりの傳來なりとぞ古來通商國の使者来りたる時な
どの饗宴に身分ある者の選ばれて踊子となり踊りしが民間にも傳りたるな
りと云ふ踊子の掛聲の（ヒヤルガヒー）といふ琉球語は平和の日の意なれ
ば平和を祝するには最も適當の舞踊なり

舞臺 琉球幕を模して三巴紋の幔を張り渡す

持物 聯盟強國の國旗

○平和踊

イモラ ワ サトメグジヨムタテタボレ
『御越はん里前御伏齋し給れ

「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

ククルヤシヤシ ウ マ
心安々と御待ちさびら⁶

「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

カアリユシ アシ ウチワリ
嘉禮吉の遊び打解てからや

「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

ユヌアキ テダヌアガ マデン
夜之明て太陽の昇る迄も

「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

ユヌアキ テダヌアガ ワ ユタ ^{ヒヤルガ ヒー}
夜之明て太陽の昇らはん宜しや「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

マントチャデ ウユワイ ^{ヒヤルガ ヒー}
永久迄や御祝さびら⁷「エイヤヨヌ」^{ヒヤルガ ヒー}「平和の日」

（二上り）

『千古未曾有の戦もこゝにをさまる時はきぬ祝ひをどれや平和の日
國旗さゝげていざいはへ

『世界平和のいしずゑをこゝに固むる時はきぬ祝ひをとでや平和の日

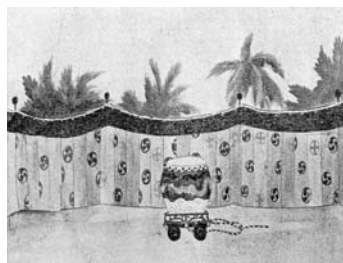


図 1

国旗さゝげていざいはへ

鼓歌『戦の雲はあとなく天の下 日影のどかに照りわたるなり』⁸

(辻村多助編『都をどり』歌舞練場、大正8年)

このパンフレットの中で都をどりの解説を書いている文学士の江馬務が、「又昨年の伊勢の鞆鼓踊、本年の世界平和に因める琉球の平和踊などは外観形態の美よりも野趣に富みたる一種の珍奇なる郷土風俗を紹介せんとす。」(江馬：1919:14)と述べるところをみると、都をどりに地方の芸能を取り入れるのは、これが初めてでは無いようである。しかし、ここで驚かされるのが、「ヒヤルガヒー」という沖縄独特の囃子詞を「平和の日」と聞き取り、解釈してしまっていることである⁹。この解釈が「平和踊」とつながり、ひいては「連盟各国の旗」を持って、「握手をする」という演出につながるのである。もはや、現在の沖縄に生きる私達には考えつかない演出である。

以上のように、都をどりで演ぜられた琉球の「太鼓踊」である「平和踊」は、明治28年の際も大正8年も、そのエキゾチックな様相と音楽で京都の人々を楽しませたといえよう¹⁰。ただ、明治28年と大正8年とでは、時代性を加味し、新たな歌詞で補強しながら、現在の私達では想像もしないような演出で消費されていったのである。太鼓を使う舞踊は、華やかさがあり、また、ある種馴染みやすいものといえよう。しかし、日露戦争、あるいは第一次世界大戦終戦直後であり(だから「祝いをどれや平和の日」という歌詞が入るのであろうが)、国際連盟規約完成といった時期やその後の歴史を考えると、単純に「連盟国」の国旗を持ち「平和を祝う」という踊りとしてこの踊りが選ばれ、仕立て直されたのではなく、琉球という外国のような、しかし外国でない自国の一部である琉球の舞踊を用いて踊ることに意味があったように思われてならない。

2. タカラヅカの中の沖縄

タカラヅカといえば、すぐにあの歌いながら踊る男装の麗人や御姫様姿を想像する人は少なくは無いであろう。しかし、その宝塚歌劇団(以下、宝塚と省略)と沖縄に接点があることは、その舞台から遠く離れたところに住む沖縄の私達には思いもよらないことである。実は宝塚の公演では、私達に馴染深い琉球舞踊の「鳩間節」も「四つ竹」も踊られているのである¹¹。



写真4

昭和5年4月、レビュー『春のをどり』（久松一聲作、古谷幸一・竹内平吉作曲、久松一聲・宇津秀男振付）が上演される。この頃の宝塚ではいわゆる歌舞伎レビューの時代¹²に入り、この『春のをどり』も昭和3年から15年までほぼ毎年春に上演される人気のレビューであった。この年の『春のをどり』は、『宝塚少女歌劇脚本集』第112号を見ると、どうやら『椿説弓張月』をモチーフにレビュー化したものである。『弓張月』を持って即、沖縄モノと称してよいものかどうかはさておき、これが宝塚における沖縄的な要素を取り入れたレビューとして、恐らく初めてのものであろう。構成は、（一）阿蘇の花戦（二）琉球首里の海岸（三）琉球の村落（四）贅の熔爐（五）獅子祭の五場からなり、脚本のト書きをみると、「其時異様な琉球國の音楽聞ゆ／夫は琉球國の土民が鶴狩りを國主から命ぜられて鉦、太鼓を打ち鳴らし、ラッパを吹きながら出てくるのである。」（宝塚:1903:29）や「雨乞いの祭りの太鼓が聞こえると共に琉球の獅子舞に扮した一群が踊りながら登場」（同:32）、「琉球の花踊りなぞが来る」（同:34）と、琉球での設定の中で琉球風な音楽や踊りが演ぜられたであろう様子が伺われる。しかし、口絵の『春のをどり』の写真を見る限り、例えば上の写真4のように、琉球の「獅子舞」も頭に小さな獅子頭を付けたものであり、少なくとも沖縄の獅子舞として思いつく類のものとは言い難い。やはり、恐らくこれらは歌舞伎の『弓張月』をレビュー化したものであり、それらの琉球の演出といっても、恐らくこれまでのものを踏襲したようなものではなかったかと考えられる¹³。

しかし、その後、宝塚では改めて昭和16年の6月に『弓張月』を上演している。この時は、レビューでは無く、『為朝伝記 弓張月』として中西武夫作・演出、葉村みき子琉球舞踊振付として上演される。ここでの注目は、やはり葉村みき子が琉球舞踊を振付していることであろう。彼女の経緯については、後に紹介するとするが、この時の様子を先と同じく『脚本集』のト書きから見てみたい。以下、琉球舞踊のト書き部分のみ抜粋してみると

第16景「琉球赤瀬の磯の邊り」

谷茶前の踊り子、男女二人現れて、男はかひ、女は籠にて踊りがある

(中略)

女四人の歌手銅鑼拍手にて新城の節ユンタをうたふ。

第17景「紅型」

紅型の幕。

花を貫いた貫花をもつた踊り子一六人出て踊る。

第18景「平和なる八重山」

八重山の王宮。

琉球王、王妃、官女、家臣。客分として、為朝、自縫、その他がある。外に胡琴、三線、鼓、胡弓、銅鑼の楽人八人。紅型まくひらくとき、その踊り子居残つて踊り居る。

そのとき「えがきみはね」をまとへるの祝女たちの御前風の舞ひ圓くおどつて一次いで歌手出で唄ふ。

鷺の衣装を着た男の踊りあり。その後鳩間節にて、歌手と踊り手二十四人出で舞ふ。終りて一同のラインアップにて一。—幕—

(『宝塚少女歌劇脚本集』1941年6月号)

このように、昭和5年の『春のをどり』とは全く異なっているのが一目瞭然である。八重山に王宮があるなど少々驚くことはあっても、ここでは琉球の場面設定での音楽や踊りがより具体的であり、葉村が琉球舞踊振付と銘打つだけあって、「谷茶前」や「貫花」、「鳩間節」、そして「鷺の鳥」の八重山舞踊までも盛り込んでいるのである。実はこれらの琉球舞踊と八重山舞踊は、後述する昭和14年の日劇『琉球レビュー』やその後続く昭和15年『八重山群島』、『琉球と八重山』ですでに上演された演目である。そして、それらの公演のダンサーの中で、中心的な存在であったのが葉村みき子であった。

葉村みき子は、昭和14年6月、第一回の東寶舞踊団の琉球調査旅行に同行。新垣芳子¹⁴ら琉球舞踊家から直接、舞踊を習い、同年11月の日劇の『琉球レビュー』に出演している¹⁵。続く昭和15年の八重山調査旅行には同行していないが、『琉球と八重山』という作品では、八重山調査へ行った巖みき子と共に振付の担当をしている。

もちろん、東寶舞踊団の琉球・八重山調査やそれら一連のレビューがそのまま、宝塚の公演につながっただけではないだろう。昭和3年には「郷土舞踊と民謡の

会」で八重山諸島の民俗芸能が上演されているし、昭和11年には日本民俗協会主催の「琉球古典芸能大会」が催されている¹⁸。その時に踊られた新垣芳子の「鳩間節」は、在京の研究者や知識人を含む観客を大いに喜ばすものであった¹⁹。これらの公演も、やはり宝塚や後述する日劇ダンシング・チームの琉球（或いは沖縄）モノに少なからず影響を与えていたといえるであろう。

このような民俗芸能を取材した宝塚の公演は戦後にも引き継がれている。昭和33年に宝塚歌劇団内に「郷土芸能研究会」が発足。日本各地の民俗芸能を取材し、その資料を基に舞台化している。そのなかには、沖縄本島や八重山の取材もあり、昭和39年8月に『日本民俗舞踊第7集琉球八重山編 ユンタ』という公演が上演される²⁰等、沖縄モノ、或いは琉球舞踊（といては良いか実際は悩むところだが）は、近年も宝塚のなかで踊り続けられているのである²¹。ただ、やはりこれら宝塚の沖縄モノには、以下に続く、日劇の沖縄を扱った一連のレビューが戦前、戦後と大きく影響しているように思われるのである。

3. 日劇の沖縄レビュー三部作 - 『琉球レビュー』『八重山群島』『琉球と八重山』

さて、話が前後するが、昭和13年、宝塚少女歌劇団はヨーロッパで公演を行う。その際、同行していた中に秦豊吉がいる。彼の創意による日劇ダンシング・チームは、当時すでに始動していた。日劇ダンシング・チームとは、昭和10年、当時の東宝取締役であった秦豊吉が、四度目の世界一周旅行から帰国後に結成した日本劇場専属のショー・チーム（舞踊団）である（橋本：1997:12）。

その秦が、ヨーロッパ公演からの帰国後に考えたことは、（1）日本の舞台芸術として外国で上演するものは、歌舞伎ではなく舞踊、日本のバレエであること、（2）その際の伴奏は必要の日本音楽以外オーケストラを使用、（3）日本舞踊は、現代の日本詩情と生活感覚から生まれた全く独立したものでなくてはならない（秦：1955：103-104）、というものであった。（1）の理由は、「表現の上に外国人をして理解を容易ならしめる点が多いからである」（秦：1943：2）とし²²、（2）は「どこまでも土俗的な民族舞踊と見るか、或は舞台の上の芸術舞踊と見るかの違い」を掲げている。

そこで彼は、「藤間花柳緒流とは、縁のない」、「日本の田舎にある地方舞踊」²³を着想するのである。秦の「日本のフォークダンスを、郷土舞踊から作り上げる

ことが、足の曲ったトウ・ダンスより、はるかに必要であるという確信は、毫厘も変わらなかった。」(秦：1955：103-104) という強い確信は、偶然に目にした琉球見物の団体旅行の広告ビラによって始動し、『琉球レビュー』誕生へとつながる。昭和14年6月、わずか3日間という短い旅行に佐谷功、舞台装置の島公靖、そしてチームの踊り手であった葉村みき子が出発した。その時の取材旅行の様子は、後に出版された『日本民族舞踊研究』²⁴に詳しいが、以下、そこから紹介しよう。

1) 『琉球レビュー』の誕生

伊波南哲²⁵からの紹介状を手にした佐谷ら三人であったが、琉球行きの船の中で琉球新報主筆の長嶺、そして三線の大家である池宮城喜輝²⁶と偶然に出逢う。この出会いが、沖縄での取材に大きく関わってくる。島の「琉球行」によると到着したその夜は三杉樓で「かぎやで風」「上り口説」「四季口説」「四つ竹踊り」「鳩間節」「濱千鳥」「天川節」、沖縄日報による「琉球レビュー」の座談会。そして最後に「谷茶前」を鑑賞。初日早々、なんとも盛りだくさんな内容である。次の日は、識名園、首里城(当時は沖縄神社)、郷土博物館などを見学。夜は旭館館主の馬上太郎の計らいで、新垣芳子、田代たか子²⁷、そして辻で屈指の踊り手といわれた上間榮子、そして野村流の池宮喜輝、金城幸吉が揃い、「こてい節」「濱千鳥」「四つ竹踊り」「谷茶前節」「鳩間節」「花風」を鑑賞している。そして、次の日は早速、新垣芳子、澄子姉妹の元に出向いて「鳩間節」を、その後、「千鳥」「谷茶前」と「ジュリ馬」の踊りを上間榮子に習う。夜は、珊瑚座で沖縄芝居を見物している²⁸(島：1943：82-91)。

このように短い時間ではあったが、連日、多く舞踊を見学することで、彼らはそれらを吸収し、また刺激を十分に得たといえよう。佐谷が述べるに、「新垣よし子さんの鳩間節、(中略)上間榮子さんの濱千鳥節、谷茶前節の三つが琉球のフォーク・ダンスとして最も私達を感激させたもので、その理由は「そのすべてを通じて流れる軽快なリズム、健康な逞しい生活意欲の現はれ、人生に対する明るい希望等、民族の意欲が端的に直接に表現されてゐる。」からだという。そして「私は今度作る琉球レビューは、この三つの踊りを基礎にして作ればよいとの確信を得た。」²⁹(佐谷：1943：24)と着実にレビューの構想が浮かび上がっていったのである。

こうして『琉球レビュー』は形づいて行く。原案を伊波南哲³⁰。音楽は担当者が同行しなかったので、難儀をしたようだが、「谷茶前」「濱千鳥」「鳩間節」「ズリ歌」「四つ竹踊り」は採譜してオーケストラに直して使用。また、宮良長包の採譜した八重山民謡「月の美しや」も使用している。しかし、その他の部分については、琉球音楽を用うることが出来なかった（佐谷：1943：25）ようである。以下、『日本民族舞踊の研究』所収の「昭和一四年七月日本劇場上演用」脚本より辿ってみよう（便宜上、筆者が本文を略し、編集を行った）。

第1景 嵐

前奏曲。 暴風雨の海上に漂う巨大な琉球船。

激しい雷鳴の中十数人の水夫が漕ぐ。嵐は去り、夜明けと共に水平線が見える。遠くから故郷の娘達の歌声が聞こえる。

第2景 南島の歌

糸紡ぎ歌合唱。榕樹しげる島の浜辺。

上手に無事に付いた船。島の乙女達の合唱に迎へられて男達は上陸。

「南 うるまの夢の島よ
赤く映ゆる梯梧の花
やさし乙女思ひを秘めて
花は開く 憧れの島

第3景 網

カーテン前。芭蕉布の着物を着けた三人の漁師の娘。

海之歌

「海はほのぐら 航路は遠く
遠く見えます灯が走る
走れ灯よ貝笛ならせ
海は寒かろ 冷たかろ
磯の藁小屋 窓から洩れる
洩れるあの娘の子守歌
沖の灯よかへり急げ
海は寒かろ冷たかろ」



写真5

（詩－大濱信光氏、作曲－宮良長包氏）

- カーテン開け。
大きな網に熱帯魚がかかっている幕。
芭蕉布の衣裳の漁師の踊り子、左
右より大勢出て「谷茶前節」踊る。
- 第4景 爬龍船 琉球の市場（舞台奥）。舞台前を海とみなして、二組の爬龍船競争が行われる。
競争の間に喧嘩。爬龍船の男達は空手。混乱の中、雨となり一同退散。
雨がやみ、空に美しい月。子供達をつれた若い女が登場。
八重山の子守歌《月の唄》（《月ぬ美しや》のこと）
を歌う。
- 第5景 琉球傘 黒い琉球傘を持ち、白緋に紫帯を前結びし、赤い花染
手拭を肩にした娘達の踊り。
- 第6景 首里古城 熱帯樹林の間に古色蒼然たる首里の古城。
一人の男出て、昔を偲びつつ首里古城の詩を歌う。
後方で、静かに夢の様に華やかな若衆踊り姿の三人の
乙女が扇を持って舞う。
- 第7景 紅型 カーテン前にて、十数名の青年達による勇ましい棒踊
り。
カーテンが開き、舞台は美しい琉球の紅型模様。
その前で「鳩間節」を16名で踊る。
- 第8景 宮古島五勇士 澄川久氏による宮古五勇士の歌と物語。
- 第9景 女護ヶ島 あたり一面熱帯樹生い茂った海岸に島の娘達が大勢伏している。
合唱「南 漆間（うるま）の青き波路に
燃ゆる血汐 赤き花よ」（ハミング）
白い琉球緋の娘達大勢真赤な梯梧の花を持って出て踊
る。
つづいて紺の琉球緋の娘達大勢下手奥より出て、大き

な円陣を作って「浜千鳥」を踊る。

最後に再び「鳩間節」になり、全員の踊りと合唱の中で、幕が降りる。

(*下線は筆者による)

このように内容を見ると、わずか3日間の取材でここまで出来るのであろうかと驚かされる。「鳩間節」「浜千鳥」「谷茶前」の琉球舞踊の他にも空手、棒踊り、爬龍船、琉球船(山原船)といった沖縄の風俗を取り入れている。また第3景には、大濱信光作詞、宮良長包作曲の「海の歌」³¹も歌われていた。第5景「琉球傘」は、この資料だけでは分かり難いが、秦によると「花風」が踊られたようで、「切々たる女の情愛を盛り、颯々たる歌の調べは、内地の地唄舞そのものを見るように哀婉なものであった。」(秦:1955:106-105)とのことである。ただ、残念ながら、第6景や9景で踊られた踊りや第8景の「宮古五勇士」の歌と物語について、詳しく伺い知ることができない。しかし、佐谷が「島君の装置と衣裳は南島の風物を如實に表はして非常な成功を納めた。」(佐谷:1943:31)というように、衣裳も芭蕉布や琉球絣など、沖縄のものと同じように使用したことは、現地取材を行ったことと重ねても好感が持て、評価すべき点といえよう。

さて、この公演は、いったいどのように受け止められたのであろうか。当時の新聞には

斬新な企画だが 期待に反して内容は平凡 日劇の琉球レビュー評

○…我國のレビュー乃至ショウは大部分外國の模倣であり、たまに日本的なものがあるとすれば、それは概ね昔ながらのお座敷的日本舞踊や歌舞伎から取材したもので一般民衆の日常生活とは、かなり縁遠いものである、ところが目下日劇に上演してゐる「琉球レビュー」は我々が最も親しみ易い日本の民族文化に着眼、取材してゐる點に異色がある。

日劇では、このため佐谷功、島公靖、葉村みき子の三人を琉球に特派して取材せしめたといふことで、その良心的な態度は企画の斬新さと共に賞すべきである。

○…内容は琉球の民族舞踊と民謡を主にしたもので、メロディ・リズム及び振りに朝鮮のそれと一脈相通ずるも



図2

のゝあるが面白く、舞台に見るカスリの着物の美しさも印象に残る。

短期的によく琉球舞踊をこなした葉村みき子の努力と島公靖の簡単乍ら効果のある装置は認むべきだが、音楽がこれ伴はず民謡が効果的に使われてゐないのは惜しい（現地調査に音楽擔當者を参加せしめなかつたことは手落である）またカーテンを無暗に多く使つたことゝ、舞台中央のマイクに歌い手を固着させた演出の拙さは、澄川久の出演（第八景）と白井鐵造のそぐはない振付（第九景）と共に大きな缺點となつた、唐手ももつと様式化する必要がある

○…要するに期待に反して内容は案外平凡であるが、この種の試みは今後大いに奨励されるべきである」

（『東京朝日新聞』昭和14年7月13日）

とあり、「期待に反して内容は案外平凡」であつたが、概ね好評であつたといえるであろう。やはり、評価されている点は、現地取材を行った点と島の舞台装置と衣裳、そして企画意図であつた。島の仕事についての反響は、佐谷が以下のようなエピソードを紹介している。

（前略）島君が舞臺用でデザインに直して作つた紺緋の衣裳で、濱千鳥節を踊つたのである。柄はすべて幾分大きめであつた上實際よりはるかに単純化されてゐたが、それをつけた二十四人の踊子が舞臺に現はれると、實際の琉球緋よりも更に美しく見えた。後に那覇で聞いたのであるが、日劇の舞臺で見た様な緋の着物を作つてほしいと注文したお客があつて、那覇では非常に困つたといふ。又、日劇の「琉球レビュー」を見て沖繩へ行つてみたくなり、はるばる観光に来たといふ観光客もあつたと云ふ。

（佐谷功「後記」『日本民族舞踊の研究』347頁）

2) 『八重山群島』

このように、幾つかの課題を残しながらも『琉球レビュー』は成功したものでいえよう。これに気をよくしたのか、発憤したのか、佐谷ら舞踊隊は翌年、八重山諸島への取材旅行を行う。前項でも紹介したが、昭和15年2月に八重山諸島と再度、沖繩本島へ取材。この時は前回の反省を踏まえて、音楽担当の若山浩一を同行させている。今回も前回同様に、八重山出身の伊波南哲が原案を書き、取材に際しては各方面へ紹介状を書いたようだ。その中の一人に喜舎場永珣がいる。佐谷が「郷土舞踊研究の有力者」と称する喜舎場は、昭和3年の「郷土舞踊と民

謡の会」で八重山歌舞団の監修および引率をしており、この地の芸能を案内するには最適な人物であった。一週間の八重山滞在中彼らは、竹富島で「竹富島のクイチャー（巻踊）」「蝶の舞」「マミドーマ」「銭太鼓」などを取材し、舞踊を上勢頭亭から習っている。また石垣島で「仲作田節」「鷺の鳥節」「目出度節」「魔踊（「へんがんとれ節）」「布晒節」「総掛踊」「黒島口説」等の舞踊を取材した（佐谷：1943：31-64）。音楽では、八重山の三線の大家である大浜津呂が協力し、《しょうかねえな（ママ）節》と《トバラーマ》を演奏しているし、また、《ムリカ星ユンタ》や《チョーガ節》《東里節》を聞いている。ここまで曲目を並べて、ふと気付いたのだが、石垣島で見た踊りの殆どが、昭和3年の「郷土舞踊と民謡の会」で上京した時の演目と重なっている³²。

八重山から沖縄本島に戻った際、彼らは、沖縄現地の新聞から取材を受けている。佐谷は八重山取材の感想を

さすが八重山には詩の国歌の國と■はれるだけに民謡も豊富で可成りの収穫がありました竹富村で豊年を祝う巻踊りにまた、農民の野良仕事をしている状況を歌つてるマミドーマな口非常に良く感心致しました。其他に黒島口説、仲竹（ママ）、鷺の鳥、目出度い節、ザイ踊りを教はつてきました。踊りも大體覚えてきましたので歸京の上アレンジして踊り子達に教へることになっています。■行の若山君が民謡を澤山採譜しましたので必ず皆さんの御期待に副う素晴らしいのが出来ることから張切つてゐます

とのべ、同行した舞踊団員の中井まさ子らは

澤山の踊りを見せて戴きましたが難しいと思つたのは鷺の鳥です憶へるのは直ぐ出来ますけれど、これをいざやるとなると却々難しく殊に踊りは線が柔かくそれを■すのに苦心いたします。大体教はつた積りですが那覇でもみつちり勉強して歸京いたします

（『沖縄日報』昭和15年2月27日）

と語っており、意欲的な取材の様子が伺われる。また、同日の『琉球新報』にも佐谷の八重山取材旅行についての談話が掲載されており、「同一人でも唄ふ毎に一度（一度）節廻しが違ふので楽譜にするには苦心したがどうか骨折甲斐のあるものを得ました。あんな離れ小島にあれ程多くの良い唄や踊りがあり、そして唄と踊りと生活の三つが一緒にとけあつてゐる事は都会では見られる事で郷土

舞踊のこんなに豊かな所は他に見られぬ事で全く感心した³³と島々の芸能について評価をしている。

翌日の新聞広告には「本日観光団・日劇一行お望歓迎の為特に今晚だけ」と銘打ち、珊瑚座で「八重瀬万歳」「千鳥節」「あやぐ」「天川」が佐谷らの為に特別に上演され、沖縄滞在中の様子を少し垣間見ることができる。また、更に翌日の3月1日には興味深い広告が掲載されている。東宝系の劇場である旭館の広告だが、東宝映画の広告に挟まれた中央に大きく「琉球舞踊」とあり、その広告文は以下の通りである。

寶塚女優東寶日本劇場中井まさ子、巖きみ子は當館支配人帖佐貞邦の斡旋に依り當地専門家の御指導受け演出佐谷功氏音楽若山浩一氏監督の下■一十六以来練習を重ね三月二日浮島丸にて歸京四月一日より東京日本劇場■て上演する事になりました。就ては三月一日夜だけお別れの御挨拶にかへ當館に於て實演発表いたします。

・
實演 一、南嶽節 (那覇修得) 二、加那ヨー (那覇修得)
三、黒島口説 (八重山修得) 四、天川 (同)

(『沖縄日報』昭和15年3月1日)

驚いたことに、この時の取材では、習ってきた踊りを現地沖縄で上演しているのである。とある芸能研究サークルの合宿及び発表会のようで良心的というべきか、その分、彼らの熱心さや意気込みを伺うことができる。

この取材は、翌月の4月にはレビュー『八重山群島』(原案：伊波南哲、振付：巖きみ子・中井正子、装置・衣裳：島公靖、音楽：若山浩一他)³⁴として実を結ぶ。残念ながら脚本を探すことができなかったが、『琉球新報』の記事にプログラムと称して掲載されたものから辿ってみたい。

背景は舞台一面の緋り横縞バック

- 一、黒島口説 二四名の縞柄トイムヤ衣裳の■舞
- 二、挨拶 カーテン前巖きみ子、中井正子

第一景 石垣島

- 三、アサドヤユンタ、背景は石垣島■■熱帯植物が繁茂してゐる

全員合唱、男■は杵をもつて米をついて歌ふ

- 四、マミドーマ、鎌、鋏、ヘラ等をもつて踊る

- 五、竹富巻踊、豊年を神に感謝して神様に捧げる踊りである、全員大きな圓陣を作つて踊る
- 六、ムリカ星ユンタ、巻踊の連中去ると■は口面にキラ（キラ）輝く星に掴められる子供達が澄川を中心にムリア（ママ）星昴星の歌を歌ふ



写真 6

第二景 舞台装置 花と蝶

- 七、ハピラの舞、八重山の離島竹富の踊、始め十二名の牡丹の花が踊り、次に同数の蝶が出て蝶舞になる

第三景

- 八、カナヨー 若い男と女の踊り
- 九、あやぐ（交遊）男八名女八名の野邊の遊びを舞踊化させるもの
- 十、天川踊 中井、巖のデュエット男は柄杓を持つ女は花染手拭を持つて踊る
- 十一、月ぬかいしゃ 水汲みの女 ■登唄歌ふ
- 十二、目出度節、子供■十六名の群舞
- 十三、布晒節、古風なスデイナカカン衣裳の女
- 四人登場 各自、布タラヒ、手桶ツルベをもつてゐる、人頭税時代八重山の乙女達が、毎年上納の反物を作るのに苦しんだ事をあらはす
- 十四、四つ竹踊り 同じく古風なドジンカカン衣裳の踊り十六名の四つ竹を鳴らしつゝ踊る

以上の背景はすべてプログの紺緋のバック

- 十五、泊り船 漁師の娘三人のトリオ
- 十六、へんがんとれ 男（漁師）十二名のザイを持つて踊る活発な踊り
- 十七、しよんがね踊、之は船路による男を見送る別離の唄である 黒い琉球傘を持った女一人登場歌に合して踊る
- 十八、仲作田節、陣笠を持つ三十二名の群舞
- 十九、黒島口説 二十四名の群舞
- 二十、フィナーレ八重山賛歌、全員合唱 一幕一

（『琉球新報』昭和15年4月17日）

フィナーレの「八重山賛歌」というのは、原案の伊波南哲作詞のもので、伊波はこの他にも「ムリカ星ユンタ」の作詞も手がけている。内容を見てみると、「黒島口説」から始まり、もちろん八重山舞踊や民謡が中心であるが、佐谷が「実際には八重山の踊りや歌以外に、例えば、天川踊、加那よ等、本島のものも多く含めた。」(佐谷：1943：61) というように、沖縄本島の踊りが多く含まれている。しかし、これらの舞踊について、佐谷は「花風の踊りは、實はあまり出来はよくなかつたのである。花風や天川踊りはその技巧の難しさのために、本當はまだ舞臺へ出すのではなかつたと後悔してゐる。」(佐谷：1943：350) と後に打ち明けている。

さて沖縄レビュー第二弾、『八重山群島』は、観客からはいかなる反応であったろうか。前掲のとおり、昭和初期の新聞が沖縄に殆ど残っていない中、昭和15年の新聞については、『琉球新報』と『沖縄日報』が現存しているため、『八重山群島』や後述する『琉球と八重山』についての沖縄のメディア状況を伺うことができる。『八重山群島』は、先のように調査の段階から開幕初日と次々記事が掲載され、『沖縄日報』では、今井邦子の「琉球レヴユウ」(上・下)が掲載されるなど、東京で発刊されている新聞の批評等を両社とも転載している。それらの中に掲載されている批評には

(略) 小きざみきざむ快適なりズム、テキパキとした四肢の動き 南國的な旋律は我々の心を捕らへて常夏の夢幻境に遊ばしめるに十分

○…音楽にも踊りにも何處か朝鮮やタイ■或はバリー島のそれに一脈相通ずるものを感じられるも面白く、素朴でしかも上品なエロテシズムの南國的土の香りと情緒は四十分の上演時間をさほど長く感じさせない。以前の琉球レヴユウや朝鮮レヴユウの時最も缺點された音楽が今度は現地へ人を派して■ばしめたために撰曲も編曲も■よりもずつと良く 島公靖の装置と衣裳の配色の美しさは特筆すべきものがあり、中でも第二景『蝶と花』の場面が最も優秀である

○…演出上の缺点もないではないが素朴の良さが、よくこれをカバーしとにかく我々はこの作品によつて日本にもこんな楽しい民俗舞踊のあるのを知ることは喜ばしいことであり日劇當事者が少なからず犠牲を拂つてこの種のものゝ紹介に努力することは一つの文化運動として認めらるべきことであろう

* 『東京朝日新聞』より³⁵

(略) 豊富な民謡と踊が次々に展開され、ユニークな南方文化への思慕を誘ふ興味ふかいレビューである

◆もちろん、それ等が八重山藝術の正確な複製ではなくレビュー的な■取による印象風な描出であることはいふまでもないが素朴な民俗藝術に多彩な舞臺性を呼吸させて、あすこまでシヨウ化した腕は推称さるべきである口島公靖の色感の寄與も大きい

◆細部についてみれば、第四景あたりからの構成が平板で個々の踊や歌が■立たず、お互い相殺し合つてゐるのが惜まれるし、四竹踊をカスタネットで片付けてしまつては全然意味がないが、しかし全体を通じてとかく活氣を失ひがちな民俗ものに、あれだけピチ(ピチ)とした現代的感覺を脈打たせてゐるのが非常に好ましい

◆その結果この古い南島の文化が新鮮な近代感においてぴつたりわれ(われ)に寄り添ふものとなつてゐるが、この成果から推して今後また海外の博覧會などに日本紹介のレビューを送つたりする場合その最適の制作者としての任を擔ふべきものは日劇だといふことを僕は強く予測させられたのであつた

*『東京日日新聞』より⁹⁶(この記事は『琉球新報』4月22日にも掲載)

(両記事とも『沖縄日報』昭和15年4月29日に掲載)

などがあり、『琉球レビュー』の時よりも評価を得ているといえよう。『琉球レビュー』やその後上演された『朝鮮レビュー』の時の課題であつた音楽を克服し、素朴な民俗芸能(記事でいう民俗舞踊)をレビューとしてシヨウ・アップさせたことで、日本各地の民俗芸能を紹介する文化運動とまで称されている。

また、橋本は以下のような批評を紹介している。

『琉球レビュー』の好評に氣を良くした泰は“新しい日本のバレエの誕生”を喜んで、前回のメンバーに音楽の若山浩一を加え、一五年二月今度は八重山群島に派遣し、ショー『八重山群島』を発表した。背景はシンボライズした染物の模様、蝶々、海辺の岩など。そこに三十二人のガールズが斜めに出て来て仲作田節を、蝶の羽根をつけた牡丹の花笠で牡丹に変身して、“蝶と牡丹”を、黄八丈のような衣裳と脚絆で“黒島口説”を・・・と目新しい踊りが続いた。構成はだいたい前作と似たものだが「仲作田節」と「蝶の舞」が秀逸で、中井はじめ三橋、千葉らバレエ組の踊り子たちのバレエ・テクニクと、日舞組との対比が壮観な見どころ。

中井と巖の「天川節」、ベビー・チームの歌う「ムリカ星ユンタ」がよかった。今回の装置・衣裳も色彩美しく、若山浩一の編曲も、同様に優れたハーモニーを聞かせた。

(橋本与志夫編『日劇レビュー史 日劇ダンシングチーム栄光の50年』60頁)

このように、前回の『琉球レビュー』と同様、島の舞台美術と衣裳についての評価が高いのだが、実はその舞台美術に沖縄出身者が関わっていた。『琉球新報』の記事によると

舞台装置島公靖に協力し今日の高評を博し■裡に山田有邦君が居る▽山田君は十年間舞台及び舞台装置を研究し■■■テーブル劇場が山里永吉君の「王女節」を演出したとき大城皓也君と二人でバックを描き上げたのあつた▽今回山田君が提出したデザインは全四景で「石垣のある海岸」「岩影から望む海」「蝶と花」「榕樹と井戸と月」とである▽何れも高さ四間に横八間の大道具で舞踊、衣裳、照明と共に配色の美しさを現出したものである▽殊に第二景の「蝶と花」は梯梧、月下美人、クロトン、佛桑華、濱ゆうを模様化したもので豪華を極めてをり山田君も今後一層■■■したいと便りしてゐる

『琉球新報』(昭和15年4月24日)

とあり、どうやら劇評で評価の高かった「蝶と花」の美術は、この山田有邦のものであった。

3) 『琉球と八重山』

さて、この公演の僅か4ヶ月後の9月、日劇ではこの『八重山群島』と前年上演した『琉球レビュー』を合わせた『琉球と八重山』(演出・振付：葉村みき子・巖きみ子、装置・衣裳：島公靖、音楽：若村浩一)³⁷ という1景のみの小品を発表している。泰が「日劇八年の間に作ったものの中の、最高のものだ」と信じている。欧州の舞台にこれを出したら、必ず驚嘆される自信がある。(泰：1955：108) といわしめた舞台である。

この作品には、沖縄から特別出演として新垣澄子³⁸が参加している。澄子は、前述した前年の『琉球レビュー』取材で来沖の際、姉の芳子と共に葉村や佐谷の前で「鳩間節」を踊っている。佐谷は、八重山取材の帰りの沖縄取材の折も新垣姉妹の基へ立ち寄る予定であったが、療養中の姉芳子のことを聞き、見舞いに行く事もできずに、帰りの船の中で訃報をきいた。帰京後、その芳子の訃報を聞いて

た日劇社長の秦は、生前舞踊を教わった事へのお礼の意味で妹の新垣澄子を東京へ招くことを発案する。8月末に新垣澄子は上京し、すぐに琉球舞踊を紹介する試演会で舞踊を披露し、関係各所に好評を得て、9月には『琉球と八重山』に出演となった(佐谷：1943：127-128)。

さて、その『琉球と八重山』について、『沖縄日報』の記事からプログラムを見てみよう。

貫花(女子部員、満開の櫻摘みアヤ糸に貫き止めて踊る)

月の唄(眞田千鶴子)

濱千鳥(女子部員)

蝶とぼたん(竹富島の踊)

鳩間節(新垣澄子、女子部員)

あやぐ(男子部員、女子部員)

巻踊(女子部員)

谷茶前(新垣澄子、巖きみ子)

前の濱(葉村みき子、男子部員)

黒島口説(女子部員)

中作田(新垣澄子)

鳩間節(葉村みき子)

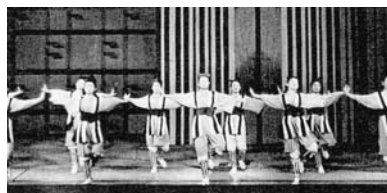


写真7

(『沖縄日報』昭和15年9月18日)

一幕構成ではあるものの、秦が『琉球レビュー』と『八重山群島』から、さらに選択して、それらを結びつけて、芭蕉の木一本と水平線という、たったそれだけの背景で『琉球と八重山』一篇にまとめた。これはたった二十分のバレーである。」(秦：1955：108)と言うように、琉球舞踊と八重山舞踊を半々にした演目構成で、背景も変えず、純粋に舞踊を中心とした舞台であったようである。葉村みき子が「沖縄の舞踊や民謡に古い純粋の日本民俗を見出した私たちは烈しい愛情から過去一年もこれと取り組んでまゐりましたが今度のステージ・ショオは特に故芳子さんへの御恩返しとして謙遜につまじ捧げるものでございます³⁹と語ったように、『琉球と八重山』は昭和14年の沖縄取材から約1年と3ヶ月間取り組んだ、いわば「烈しい愛情」の産物としての沖縄レビューの集大成であったといえる。芳子への追悼の意もあるが、その集大成を飾るにふさわしく、結果と

して、沖縄から新垣澄子が出演したとも考えられる。それは、この『琉球と八重山』が昭和17年2月から再演され、戦後も又再演している（橋本：1997）ことから伺えるのである。

さて、この『琉球と八重山』について藤森成吉は、

（略）その意味で、今日本舞踊界に最も必要とされるものは、地方民俗舞踊の研究であろう。伝統の舞台舞踊乃至座敷舞踊は、能楽と同じくすでに昇華されすぎ、生活から遊離しすぎて、新しい母胎は殆ど予想されがたい。

毎年日本青年館で催された各地民俗舞踊の公演が近年途絶えてゐることは惜しまれる。

今、日本劇場で東寶舞踊隊が演じている「琉球と八重山」舞踊は第一に如上の眞摯な紹介乃研究至点、第二に、それら遠海の島々の舞踊がすぐれた特色を持つ点、推賞に値する。全体的に見て、それはむしろ単調である。然しそれは、生活的民俗的健康性に依る単調さである。

むしろ、ヨリ古く、ヨリ■的な、繊細をきはめてはゐるが昇華されすぎて発展の余地のない琉球古来の種■を採らずに、動き多く、態的に発刺とした鳩間節風のものを探つた見地に賛成したい。

ただ、十ばかりの連鎖舞踊をほとんど同じテンポにしたための単■感、稲の刈入れその他の生活舞踊を一■の海岸風景のなかでする演りかた、等は採らぬ。遙々琉球から招いた新垣澄子のそれらの踊りが特に感動的であるだけ、今度の試みのためにもいつておきたい。

（『朝日新聞』昭和15年9月17日）

と評している。この記事は『琉球新報』にも9月26日に掲載されているが、これまでのレビューと同様に民俗芸能に着眼した点、そして、眞摯に取材研究をした点が評価されている。ただ、舞台背景を一つにした事については批判的である。しかし、「十日東京発」の記事として『沖縄日報』に転載された舞台装置についての記事に舞台装置担当の島は、「簡素であつても、その前で十種や二十種の踊りを踊られても決して効果を損じたりしないやうに装置の美しさを作り出したいと願つてゐます。今度の『琉球と八重山』の装置はさういふ氣持から湧いた僕の試作なんです」⁴⁰と述べており、あえて実験的に行つたようである。

以上のような沖縄レビュー三部作は、民俗芸能を取材することによって、花柳

流的な指向から離れ、新たな日本の民俗的な舞台を作ることには挑戦したもので、その試みは観客に受け入れられたと言える。しかし、同時期に「朝鮮レビュウ」⁴¹ や「燃ゆる大地、台湾」⁴² といった植民地の芸能を取材したレビュー群が上演されていることを考えると自ずと違和感を覚える⁴³。それらの地域についても琉球・八重山と同じく『日本民族舞踊の研究』に纏められているのだが、その冒頭に秦が「今日私共すべての仕事は、先ず大東亜共栄圏を目標とすべき以上、私共は之等の民族の芸術を一層よく研究しなければならぬ」（秦：1943：5）と述べるようにやはり、これらの一連のレビューは大東亜共栄圏を見据えたもので、一見外国のようで外国では無い沖縄は、その一部として捕らえられていたといえるであろう。だが、これらレビューの背景にある「日本民族舞踊」という思考は、渡辺が言うように戦時下で突如として起きたことではなく、明治期以来、日本が近代国家としてその地歩を確立するために、「東洋」と「西洋」のはざまで何とかして「国民文化」を構築しようとした取り組みの一つ（渡辺：2002：295-302）であったとも考えられるのである。

また、これらの沖縄レビューは、戦後、沖縄で編成された琉球歌舞団が県外・海外各地で行った際の公演や、近年ではJTB主催の観光客に対して上演される公演「杜の宴」等々の観光客に対する公演、或いは三隅治雄原作「南海のムリカ星」などの、地元客に対して上演される琉球芸能をショー化（或いはレビュー化）したものなど、沖縄内外から発信される様々な新しい琉球芸能公演の先駆けといえる。戦後のこれらの活動は、日本の国家アイデンティティの中から脱出し、「琉球」の芸能として地元沖縄のアイデンティティに寄与し、確立していくための手段の一つであるとも考えられる。その意味でも、この沖縄レビュー三部作は、現在の私達に何かヒントを与えているように思われてならない。

おわりにかえて

都をどり、宝塚歌劇団、日劇ダンシング・チームと3つの団体における琉球舞踊の上演のあり方を辿ってみたが、資料紹介も兼ねて多くの記事や文献の引用を行った。本稿では、その引用文について事例としてのみ扱っているために、実はその中の興味深い点などの考察を残したままである。また、大正14年に歌舞伎座で上演された田辺尚雄作の新作舞踊劇「与那国物語」⁴⁴や昭和15年に京都の鴨川

をどりで芸妓達によって「谷茶前」などの琉球舞踊が踊られたこと、又、新聞広告でのみしか確認できなかったが、昭和18年2月の日劇ショウ『八重山乙女』（全4景）の上演についても、今回調査することができなかった。今後、更なる資料収集を続ける一方で山積みになったそれらの課題を片づけていくことが必要となる。

ただ今回の調査で興味深かった点に、戦前の沖縄におけるメディアの状況があげられる。今回は主として当時の新聞を調査したが、首都圏で発刊される大手新聞の記事が、1、2週間の後には、地元紙に転載されており、戦前の沖縄においても中央における芸能を含めた文化的な情報も以外と早く、そして多く入っていた。沖縄で発刊される地元紙が当時、どれぐらいの発行部数があり、読者の数があつたかを考えなくてはならないにしても、これらの事は、琉球芸能本土公演の情報やその地における評価を、沖縄の人々がダイレクトに知る事ができたことを意味し、彼らのその後の芸能活動や環境に少なからず影響を与えたと想像できる。他者の目にさらされる事で、新たな価値付けがなされたり、また活力剤となる事もあるであろう。このような沖縄の芸能が沖縄県外で消費される事について、また、近年の沖縄の様々な芸能活動について沖縄芸能の近代化と共に考えることが目下の課題である。

【写真・図版】

- 写真1 祇園温習会の「太鼓踊」（『日出新聞』大正8年3月13日）
- 写真2 都をどりで「平和踊」（『日出新聞』大正8年4月3日）
- 写真3 都をどりで「平和踊」（『日出新聞』大正8年4月6日）
- 写真4 レビュー『春の踊り』の中の「獅子踊り」
（『宝塚少女歌劇脚本集』112号、宝塚歌劇団、1930年）
- 写真5 日劇の『琉球レビュー』
（『エスエス』第4巻8月号編、東寶発行所、1939年）
- 写真6 日劇の『八重山群島』
（東寶舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』の口絵より）
- 写真7 日劇『琉球と八重山』
（秦豊吉『日劇ショウから帝劇ミュージカルスまで』の口絵より）

図1 都をどりでの「平和踊」の道具帳

(辻村多助編『都をどり』歌舞練場、大正8年)

図2 『琉球レビュー』の広告(『東京朝日新聞』昭和14年7月1日)

【註】

1. 『演劇百科大事典』(平凡社、1962年)によると、「歌・踊り・寸劇・曲芸などの諸要素をたくみに組みあわせた娯楽の大衆演芸をいう。」とあり、本稿では、娯楽的要素の強い、歌や音楽、踊りをともなうショー形式のもの、として考えたい。
2. 『沖縄大百科事典』の「琉球レビュー」の項には、「1939年(昭和14)伊波南哲の脚本をもとに、日本劇場で上演されたミュージカル。総監督佐功。9景<嵐・南島の歌・網・爬竜船・琉球傘・首里古城・紅型・宮古五勇士・女護ヶ島>からなり、ダンシングチームを使って琉球舞踊を振り付け、大成功を収めた。沖縄側から新垣芳子・澄子の姉妹が琉舞の指導者として参加。琉球芸能の紹介にも大きな役割を果たした。」(宜保栄治朗執筆)とある。
3. 京都で毎年春に行われる舞踊会のこと、明治5年に催された博覧会の付帯事業として行われたのが始まり。島原宮川町や先斗町など京都市内各所に点在する芸子達がそれぞれで団体舞踊を中心とした舞踊会を開催し、その中でも祇園が最も成功したといわれ、以後毎年開催されている。創立当初から井上八千代(三世)が振り付けに起用され、現在までいたる。「都をどり」は群舞であり、舞台はショー的に構成されていることから本稿で取り扱った。
4. 「琉球芝居の一座」『日出新聞』(明治26年8月10日)によると、一座は、京都の花見小路にある祇園館で8月13日から興行。8月17日から18日には「琉球演劇」と題した竹洒門静枝の劇評が掲載されているが、舞踊については概ね良い印象をもったようだが、組踊については、「其語通ぜずして却つて趣味あるに似たり、是を純粹の日本語にして演じなば、見られたものにあらざるべし」(8月17日付)と厳しい。この連載の中に「太鼓踊(ちじみをどり)」も「洗淨にて兵士を慰さむるに用る、少年四人女四人、舞臺の大太鼓を拍て廻る。集散交代、愉快にみる」(8月18日付)と紹介されている。この後に続く名古屋でも『扶桑新聞』(明治26年8月31日)にも演目や俳優の名が紹介されている。
5. この写真の様子から現在の舞踊「鼓囃子」であると思われる。山内盛彬著『琉球の舞

踊と護身舞踊』の「鼓囃子(ついちんべーし)」の解説に「数人の紫頭巾胴衣かかんの女子が輪になって、中央においた大太鼓を打ち鳴らしながら、その周囲をぐるぐる廻る。この踊りは芝居時代になって、冠船劇のかっこ踊にヒントを得て創作されたといわれているが、着付所作振付などは朝鮮風である。その踊り方も琉球舞踊としては異色なところがある。」(山内：1963：132)とあり、口絵には小さいものの「鼓囃子の演技」として写真ものっている。(＊下線は筆者による)

6. ルビからすると「いまみつかば里前御状持たちたばうれ 心やすやすとお待ちしやべら」(大意：あちらにお着きになったら手紙を託して下さい、心安らかにお待ちしていますから。)(清水：1994：170)の歌に対応すると考えられ、本来は恋愛に関する歌であることがわかる。
7. 上句は「夜の明けててだやあがらはもよたしや」(大意：夜が明けて太陽が上がってもいい)(清水：1994：1117)に対応し、下句はルビから「万年迄やお祝いしやべら」(大意：万余の年までお祝いをしよう)に対応するもので、二首目の「お祝いの遊びに皆うちとけたからは、夜が明けて太陽が昇までお祝いを続けましょう」と並び祝儀的な饗宴の歌である。
8. 歌詞をみると前半の部分は、琉歌形式で3首歌われているが、「二上がり」と調子が変わったところをからは、七五調の唄になっている。囃子からみて、前半の歌は《竹富節》であろうと予想できるが、現行の「鼓囃子」の《中作田節》《竹富節》《南嶽節》《蝶小節》の4曲中、野村流古典音楽保存会『声楽譜付舞踊工工四』第二巻(1996年)、先の山内盛彬の「鼓囃子」のどの曲の中にも同様の琉歌を確認することはできなかった。今後の調査課題である。
9. 小浜光次郎著『やさしい琉歌集』(2003年)によると《竹富節》(ここでは《武富節》と表記)の囃子「エイ・エイ・ヨウ・ヌ・ヒヤルガヒ」を「それは、そうだ、そうしましょう、それはやるがよい」と訳している。
10. 4月4日付『日出新聞』では早くも「平和踊が人気の焦点になつて居る様である」とあり、また、4月6日付の同新聞では「妙なもので平和踊の唄『イモラワン……』を早覚えて頼りに座敷で通を振り廻すた客が出来たり態々舞妓を呼んで其振りを踊らしたり祇甲界限では既に流行出して彼方此方で囃子立てゝ居るのもきこえる」とある。この流行もあってか、この年の都をどりは始まって以来の大入りだったようである(『日出新聞』大正8年4月14日付)。

11. 筆者は数年前、偶然に宝塚の『ジャパン・ファンタジー 夢幻花絵巻』のBS放送を目にした。何気なく見てみると、薄暗い舞台の中、電飾で飾られた花笠と紅型衣裳が浮かぶ「四つ竹」とワイヤレスマイクを仕込んだ男役が歌いながら踊る「鳩間節」（記憶は確かではないが、どちらも人数は多かったように思う）が踊られていた。突然の琉球舞踊に驚くも、それにもましての驚きはその演出であった。
12. 渡辺によると日本物を得意としていた榎茂都陸平（上方舞舞踊家。宝塚歌劇団の舞踊教師・作者）らが「春のをどり」を担当したところから（榎茂都は昭和2年から4年まで担当）日本物レビューへの動きが加速したといわれ、以後昭和6年には「歌舞伎レビュー」と銘打った『かたきうち』、昭和7に『忠臣蔵』、翌年には『二人傀儡師』、『お国歌舞伎』と続き、宝塚のなかに確固としたジャンルとして位置づけられた。（渡辺：1999：101-104）
13. 「異国趣味の琉球の踊をふんだんに盛った」（『歌劇』第121号、1930年）というが口絵の写真だけでなく、「レビュー春のをどり」の楽譜（『宝塚少女歌劇楽譜集』第107号、1930年）を見ても、琉球音階は使われず、音楽からも沖縄的な要素は見られない。
14. 1917生～1940没。父・新垣松含も同じく舞踊家であり役者。父の亡き後、同じく舞踊家の妹澄子と昭和11年に鳩芳會（「松陰会」から改称）を主宰。鳩芳會趣意書には、芳子の踊った「鳩間節」等の功績が掲げられている（新垣松含記念誌編集委員会編『梨園の名優 新垣松含の世界』2004年、211頁参照）。芳子の「鳩間節」については〔註27〕参照。
15. 昭和14年7月1日付けの『東京朝日新聞』夕刊に「世のレヴユウ作家よ 日本の郷土を愛せよ／神秘常夏の國琉球の詩人伊波南哲氏の原案に基き、わが日劇チームの一員 葉村みき子は自ら琉球に赴き親しくその舞踊と風景に接して作り上げたる『琉球レヴユウ』の一篇、正に日劇ショウが常に提唱する『日本レヴユウ』たると共にチーム女性部員が自ら作り、自ら演ずる最初の作品として世に誇り得るを悦ぶ。」という広告（「琉球レビュー」の項の写真を参照）が出ているが、ここにも葉村みき子の名前が大きく取り上げられている。
16. 日本青年館の主催事業で、大正14年に開館の祝賀事業として行われた。柳田國男と高野辰之が顧問、小寺融吉が舞台指導におり、この会によって各地の民俗芸能が注目され、研究が進んだといえる。戦後は「全国郷土芸能大会」、「全国民俗芸能大会」と名を変えながらも同趣旨の会は毎年行われている。詳しくは熊谷辰治郎「日本青年館と

民俗芸能運動』『民俗芸能』59号（民俗芸能学会、1979年）を参照。

17. 喜舎場永珣を団長に、八重山から13名の男女が参加。《ムリカ星ユンタ》《白保節》等の民謡と「赤馬節」「鶴亀節」「布晒節」「黒島口説」などの舞踊を上演した。
18. 日本青年館にて5月30、31日の2日間に渡り開催された。この公演が在京の識者達に琉球芸能を紹介した功績は大きい。主催した日本民俗協会が発行する雑誌『日本民俗』では、約半年にわたりこの「琉球古典芸能大会」関連の記事が掲載され、戦前・戦後の芸能研究の中でも重要な公演といえる。開催には折口信夫が大きく関与したと言われ、昭和3年に民俗芸能として八重山諸島の芸能が紹介されたのに対して、この公演では組踊を中心とした琉球古典芸能を上演している。
19. 『日本民俗』第2巻第1号（日本民俗協会、1936年）に掲載された「琉球古典芸能の印象」には厳しい批評も多し、村山知義や土岐義摩が新垣芳子を評価しているし、また、北野博美は座談会で「名護愛子と新垣芳子が出ると、カメラが全部此の二人に向けられて外へはちつとも向けません。」（『日本民俗』第2巻第4号）と証言している。
20. 『歌劇』467号（昭和39.8）の中に渡辺武雄らが「ユンタ」公演の取材の様子を語ったインタビュー記事が掲載されており、この座談会の中には、島袋光裕ら沖縄の舞踊家の名前もあり、島袋光裕も沖縄の芸能について語っている。
21. 戦後の宝塚歌劇団では、1951年に「今婦仁秘話」（西崎緑・高木史郎作、金井喜久子作曲。『歌劇』312号によるとレビューでは無く、琉球舞踊と銘打たれている）を東京で上演。1953年にグラウンド・レビュー「ひめゆりの塔」、1959年には「弓張月」が再上演されている。また、近年では1997年の「春櫻賦」に「鳩間節」が踊られ、1998年の香港公演のレビュー「夢幻宝寿頌」の「沖縄幻想」という場で「花笠踊」「鳩間節」が踊られている。
22. 「歌舞伎ではなく」とされる理由には、宝塚の「ヨーロッパ公演」（昭和13年10月～14年3月）、続く「アメリカ公演」（昭和14年4月～7月）で「歌舞伎レビュー」が上演されたことにも関係していると思われる。
23. 秦は、「東京の日本青年館で見られる全国郷土舞踊大会」を例に出し、「郷土舞踊を音楽も振も、そのままの上演であり、素朴な、力強い振や、単純な衣裳の美しさはありながら、まだこれを整理し、複雑化し、さらに舞台芸術化していない。」（秦：1955：104-105）と述べており、彼の地方舞踊を取り入れる構想の根底に「郷土舞踊と民謡の会」があっことがわかる。

24. 佐谷功（東寶舞踊団）編で昭和18年に東寶書店より発行。昭和14年から17年までの東寶舞踊隊の現地調査報告等を纏めたもの。『琉球レビュー』他一連のレビューの資料となる。「琉球と八重山」の他、「日向の郷土舞踊」「薩摩と奄美大島」「飛驒と東北」「半島」（朝鮮のこと）「臺灣」の6章からなる。
25. 1902生-1976没。八重山出身の詩人であり作家。大正11年に近衛兵に選抜され上京し、除隊後は警察官として働きながら、詩の創作活動を始める。代表作の長編叙事詩『オヤケアカハチ』は、昭和12年に東京発声映画社で映画化もされた。
26. 1886生-1967没。琉球古典音楽野村流の演奏家。大正4年に金武良仁、伊差川世瑞らと共に琉球古典音楽をレコード出し、昭和11年に日本青年館で行われた日本民俗協会主催「琉球古典芸能大会」にも彼らと共に地謡として出演している。著書には『三味線宝鑑』があり、三線の型の研究の他、各地の名器と呼ばれるものを調査し写真と共に紹介している。
27. 前掲〔註14〕と同様に昭和11年の「琉球古典芸能大会」にも出演している舞踊家。玉城舞踊研究所所属で、島はわざわざ「いつもは新垣氏とは派が違ふので、一緒に踊らない」とも述べている。
28. 島公靖の「琉球行」の初出は『東寶』第67号（1939年7月）第68号（1939年8月）。スケッチの他、「那覇の波止場にて」「糸満の市場」の写真も掲載されている。
29. 佐谷は「鳩間節」のことを「琉球舞踊の白眉」と賞賛し、また「この踊りの振は幾通りある様であるが、その中でも最も深い興味を持つたのは、故新垣よし子の鳩間節であつた」とし、その理由を「軽快な、澁刺たる近代的感覚に満ちた振付」（佐谷：1943：19）であると新垣芳子の踊る「鳩間節」を賞賛している。佐谷のこの時の感動が、次作の八重山物や新垣澄子の招聘、さらには以後、宝塚で踊り続けられる「鳩間節」の発端になっているように思われる。
30. 伊波の原案は佐谷によると、「原案は換骨脱胎されて殆どその佛を止めなくなつたが、その詩的精神は脉々と生残つて、詩的情趣に充ちた舞臺を實現した。」（佐谷：1943：31）と精神的なものしか残っていなかったようである。
31. 作曲の宮良長包（1883生～1939没）は、八重山島出身の音楽家。音楽教師として教鞭をとる傍ら、郷土色豊かな作曲作品を数多く残している。昭和7年には宮良長包作曲集『首里古城』を東京の出版社より出版。昭和11年にも『琉球の新民謡』を出版している。

32. この時の舞踊の指導も、昭和3年の時と同じく森田永船があたっている。しかし、残念ながら踊り手にはその「郷土舞踊と民謡の会」出演者と同じ名前は無かった。
33. 『琉球新報』昭和15年2月27日掲載。「竹富島の唄と踊を佐谷氏等禮讃」の見出しがついている。
34. 『八重山群島』は昭和15年4月17日から5月7日まで上演。全6景からなり、出演はNDT（日劇ダンシングチーム）であった（橋本：1997：60）。
35. 『東京朝日新聞』には、昭和15年4月20日付けの記事として掲載。
36. 『東京日日新聞』には、昭和15年4月23日付けの夕刊の記事として掲載。「推称すべき腕 日劇『八重山群島』」という見出しで光吉夏爾が執筆している。
37. 『琉球と八重山』は昭和15年9月11日から24日まで上演。出演は東宝舞踊隊。特別出演に新垣澄子（橋本：1997：62）。
38. 1922生-2005没。父松含、姉芳子の亡き後、昭和15年より新垣澄子琉舞研究所を開設し、その芸を引き継ぎながらも、日劇レビュー『琉球と八重山』、東宝劇場「昭和の名人会」や映画「白い壁画」に出演するなど、戦前、琉球舞踊を数多く在京の人々に紹介した一人である。戦後も後進への指導や発表会の開催などの他、芸能コンクールの審査、又、県外公演等の数多くの芸能活動を行った（新垣松含記念誌編集委員会：2004）。
39. 「澄子を中心に群舞 日劇の琉球と八重山」『沖縄日報』昭和15年9月18日
40. 「轉換無しの一椀道具"琉球と八重山"の舞台装置」という見出しで『沖縄日報』昭和15年9月17日に掲載。本文に「十一日から日劇で上演する」というところから、公演初日前に東京で発刊された新聞に掲載されたものと思われる。
41. 昭和14年12月上演。
42. 昭和15年9月25日から10月8日迄上演。7景からなり、構成演出を渡辺武雄。振付は中村重子、装置・衣裳は、沖縄レビュー三部作と同じく島公靖。音楽は北村滋章。この台湾レビューについては、『沖縄日報』にも上演を伝える記事がある。
43. 『日本民族舞踊の研究』巻末に所収されている「東寶舞踊隊日誌より」（352-353）には
 昭和一四年六月 第一回琉球行一佐谷功、島公靖
 七月 日本劇場上演「琉球レビュー」
 同 十月 第一回朝鮮行一佐谷功、島公靖、三橋蓮子
 十二月 日本劇場「朝鮮レビュー」
 同 十五年二月 八重山行一佐谷功、若山浩一

- 四月 日本劇場「八重山群島」
- 九月 日本劇場「琉球と八重山」
- 同 六月 台湾行一中村重子、北村滋章
- 九月 日本劇場「燃ゆる大地、台湾」
- 同 九月 日向行一島公靖、若山浩一
- 十一月 日本劇場「日向」
- 同 十一月 第一回東北行一野口善春、榊原俊三郎、吉村倭一
- 翌年二月 日本劇場及び東京寶塚劇場「雪國」
- 同 十二月 第二回朝鮮行一三橋蓮子
- 翌年二月 日本劇場「春雷」四月「朝鮮の春」
- 同 十六年五月 第二回東北行一野口善春、平岡照章、橋本芳夫
- 九月 日本劇場及び有楽座「湖畔の祭礼」
- 同 七月 第三回朝鮮行一三橋蓮子、若山浩一、島公靖
- 十月 日本劇場及び京城寶塚劇場「志願兵」
- 同 七月 鹿兒島、奄美大島へ一花柳壽二郎、小林ヤス子、北村滋章、浅田二郎
- 翌年二月 日本劇場「奄美大島の花嫁」
- 同 三月 日本劇場及び東京寶塚劇場「薩摩組曲」
- 同 十七年二月 飛騨行一野口善春、橋本芳夫、平岡照章
- 六月 日本劇場「飛騨の歌」

と当時の活動の様子が記されている。これを見ると日本各地の民俗芸能と朝鮮・台湾という植民地の芸能が上演されていた事が解る。

44. 創作者の田辺尚雄（1883生～1984没）は、音楽学者で大正11年に沖縄本島、宮古島、八重山諸島に渡り、音楽調査を行っている。「与那国物語」は、その時の経験から、「この面白く且つ珍貴なる琉球舞踊を東京人にも知らせたい」（田辺尚雄『続音楽粹史』日本出版、1953年、141頁）と踊りを集めて舞踊劇にしたものである。大正14年4月の歌舞伎座での公演が初演で、その後、昭和3年に明治座で、昭和7年に浅草松竹座で再演された。舞踊劇には「谷茶前」や「鳩間節」、「黒島口説」が収録されている

【引用・参考文献】

- 新垣松含記念誌編集委員会編 2004 『梨園の名優 新垣松含の世界』 松含流家
元比嘉澄子
- 池宮正治 1992 「沖縄芝居参上—明治26年京阪・名古屋公演—」(『新・琉球史—
近代・現代編—』琉球新報社)
- 江馬務 1919 「祇園町と都踊との沿革」(辻村多助編『都をどり』歌舞練場)
- 沖縄タイムス社 1983 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社
- 佐谷功 1943 「琉球の舞踊」(東寶舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』
東寶書店)
- 島公靖 1943 「琉球行」(東寶舞踊隊・佐谷功編『日本民族舞踊の研究』
東寶書店)
- 清水彰 1994 『琉歌大成 本文校異編』 沖縄タイムス社
- 宝塚少女歌劇団 1930 『宝塚少女歌劇脚本集』第112号、宝塚少女歌劇団
1941.6 『宝塚少女歌劇脚本集』、宝塚少女歌劇団
- 東寶舞踊隊・佐谷功編 1943 『日本民族舞踊の研究』東寶書店
- 奈須藤三郎 1939 『東寶』第67号、第68号、東寶発行所
- 橋本予志夫 1997 『日劇レビュー史 日劇ダンシングチーム栄光の50年』三一書
房
- 秦豊吉 1955 「琉球・八重山・バリー」(『劇場二十年』朝日新聞社)
1958 『日劇ショウより帝劇ミュージカルスまで』秦豊吉を偲ぶ会
- 山内盛彬 1963 『琉球の舞踊と護身舞踊』民俗芸能全集刊行会
- 渡辺 裕 1999 『宝塚歌劇の変容と日本近代』新書館
- 渡辺 裕 2002 『日本文化 モダン・ラブソディ』春秋社